
ワールドエンドによろしく！

嘘月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールドエンドによろしく！

【Nコード】

N9669Z

【作者名】

嘘月

【あらすじ】

誰よりも理想主義者な偽現実主義者 彩瀬^{あやせ} 翔生^{かなる} ある日、彼は一人の儚げな少女と出会う。World End 彼女はそう名乗った。翔生を中心に狂いだす世界。何気ない日常を世界の終わりから守る日々が始まる。

World end(前書き)

初投稿させてもらいます。至らぬ点だらけでしょうが、生ぬるい目で見ていただけたらと思います。ご意見は真摯に受け止めたいと思っていますので、何か頂けたらと思っています。よろしく願います。

w o r l d e n d

風が吹いた。

少女の髪は流されて、形が無くなる。

酷く醜く人で混雑した交差点を滑らかに、流れるかのように避けながら。

誰かに触れる事なく踊るように、誰かを恐れるかのように慎重に。
誰よりも世界を愛した少女が天を仰ぐ。

誰かが呟いた。

「世界が終わる」

そう呟いた気がした。

起立と礼を終えて放課後の教室を誰よりも早く出る。

季節は春から夏へ切り替わり、ようやく夏らしくなってきた7月。

汗ばんだ肌にYシャツという組み合わせは最高に気持ち悪い。

「じゃあな彩瀬^{あやせ}」

「おう、またな」

高校2年生のこの時期は世間が騒がしくて嫌気が差す。

部活のインターハイ？夏に向けて彼女ができました？国立大学目指して受験勉強？

クソくらえ

インターハイ行ってもプロになるのは一握りだ。社会の役に立つ？人並みに生きていたら人並みに挨拶も礼儀もできる。

彼女ができた？好きな人ができた？一時の感情に身を委ねて、感情の逃げ場を作ってるだけに過ぎない。結婚前提か？結婚したら本当に幸せになれるのか？

レベルの高い大学に行って満足か？そこでのお前は輝いているのか？くだらない能書きにしか頼れないガリ勉野郎か？

もつと現実を見る、何が効率のか何が利益になるか考えていけ。

……と言っても、主観的にも客観的にも一番損してるしてるのはやつぱり俺だった。

友達を作るのは苦手ではない。年上と話すのも苦手ではない。世間と関わるのも苦じゃない。理想を追い求めるのは誰よりも好きだった。

俺 あやせ 彩瀬 かなる 翔生は、誰よりも理想を追い求めていたに違いない。バスケットボール部に入り、持ち前の運動神経と身長を活かし、チームのエースという座を手にした。

県のチームでは俺を知らない選手なんていなかった。だからこそ、特待生としてこの高校に推薦で入学する事が出来た。

この先俺は何処までも理想を追い求められる、そんな事まで実感していたんだ。

そんな毎日に生き甲斐を感じていた矢先に、バスケットを始めるきっかけをくれた先輩が交通事故で手首を無くした。

彼のシュートフォームはまるで理想そのものだった。

そんな先輩が格好良くて、俺はバスケットを始めた。

理想を求めて、何かに打ち込む日々が終わる音。

俺はバスケットなんか好きじゃない事に気づいた。

俺が好きなのは理想を追い求める自分。

理想が朽ち果てた時、その理想を越えたような空虚が襲った。

何か一つを努力なしで終わらせてしまったような、至極極まりない背徳感。

俺なんかよりもずっと素晴らしい選手で、俺なんかよりもずっと将来性のあつた先輩、そんな先輩の両手首から先が空と交わっていた。

沈黙の続く病室の中でこう言われた。

「お前は俺のバスケットをしてくれ、お前は俺だ。最後の希望って奴なのかもしれないな」

その言葉の重みに耐え切れなくなつた俺は、逃げるかのようにバスケットをやめた。

わかつていた。先輩の求める理想を追いかけるべきだと。それが先輩への恩返しでもあつて、先輩が望む理想だと。理想は何よりもリアルである。

何かを手に入れようとすれば何かを失い、ときには手に入れようとしたものさえ消えてなくなる。

先が見えているなら、最初からしなければ良かった。

理想を失つた俺には何も無かつた。

きっとそのまま続けるという選択肢もあつたに違いない。

それをしなかつたのは何故だろうか。

考えたくもなかつた。

高校1年生の冬に、俺は世界とやらを憎んだ。

それがこの捻くれた性格の理由。

これからもきつと、自分の首を絞め続けるだけの思い出になるだけなのだろう。

「なーに辛気臭い顔してんだ!」

「!?!?.....後ろから押すなよ、倒れるとこだったぞ」

「ははは、わりいわりい。どうよお茶でもしないか?我が親友」

「いや、いい」

「そんな気分じゃねえか……じゃあうち来いよ、お気に入りの格闘技見せてやるよ！まじすげえんだぜ！」

こいつ、井上隆二いのうえりゅうじは中学校からの友人で今も同じクラスの腐れ縁だ。俺がバスケットをやめてから心配して余計に絡んでくるようになったわけで、親友なんて大それたものではない。

井上は街の不良5人に絡まれても無傷だった、なんて噂もあり学校ではちょっとした有名人だ。

「お前と格闘技を見たら、俺がお前の技の餌食になるよな？いつも」

「お前もかかってこいよ！その方が盛り上がるだろ！」

「痛いのは嫌いだ。特に脳筋のお前となんて断固拒否する」

「それは残念だ、勉強のし過ぎは体に味噌だぞ？」

「……それを言うなら身体に毒な」

「あ、あー変わらないだろどっちでも」

毒と味噌が変わらないなら日本人は妖怪か新人類なんだが。

「ま、いいや！もう少し楽しく生きようぜ翔生」

「十分充実しているけど？」

「俺の目は誤魔化せねえよ。お前はもつと刺激を求めてる。違うか？」

「……お前の目も腐ったもんだな、刺激なんてリスクと同義語だ。自分のリスクになる事なんて望んでいないさ。帰り際に理科実験室で防腐剤でも貰って来い。ちゃんと注意事項読んで使えよ」

「あ、あれえ？そこはもつとこ……流石俺の親友、やつぱなんでもお見通しだな！的な流れだったろお」

「他人から出直して来い」

「そこから！？」

「……ありがとな」

「んー……そっか、また鑑賞会に誘うわ。じゃあな」

また誘われるのか……そう思いながらもしっかりと馬鹿な友達と別れる。

下校途中の生徒の群れに混じり、何の捻りも無い背景へと身を委ねた。

刺激の強い楽しい人生……か。

そんな人生はたしかに魅力的だ。

ただ、それは成功例としてであって、必ずしも、そのリスク、つまり犠牲を支払って絶対に手に入れられる対価ではない。

そんなものには魅力がない。自分が頑張った分だけ落胆するならば、そんなものはただの悲劇でしかない。

酷く捻くれた性格にもそろそろ自己嫌悪し飽きていた。

何か世界を狂わすきっかけもあるハズもなく。

世界を変えたいなんて妄言に誰も耳を傾けてくれない。

どこまでいっても、結局俺は理想に憧れ続けているだけだった。

いつも通りに騒がしい街の表通りへと差し掛かる。

下を向いて歩くサラリーマン、笑いながら帰る学生、こうして冷静に見るといつもあるのは現実。

裕福な国だ、平和な国だなんて世界で言われているが、結局それは隣の芝生って奴であって……何が起ころうともきつとこの世界は変わらない。

そう、きつと……何も変わりはないんだ。

「え？」

本物の風景の中に、今何かが”存在”した

たしかに、今非現実的な存在があった気がした。

ここだと言わんばかりに主張するかのような違和感。

真っ白い髪を靡^{なび}かせて、踊るように人ごみを掻き分けていく。

そんな異質な存在に、誰一人目を向けなかった。

何かに惹かれて、ただその白い軌跡を追うことにした、まだ暑い猛暑を奮う7月の良く晴れた日。

「私の事、見えるんだね」

俺は世界とやらに出会った。

廻り始めた世界

「私の事見えるんだねって……はは、どういう意味だよ」
額から変な汗が出た。

周りの風景は、ただ日常を映して流れていく。

何も変わらないハズだ

現に何も変わっていない。

それなのに身体が震える。まるで白昼にお化けでも見たような。

そう……お化け？

「そのまんまの意味だよ、私に見える人は私を救ってくれる人。そうでしょ？」

通行人が俺達を腫れ物でも見るような目で見る。

いや、正確には”俺”だけを見ている。

目の前の少女……と言っても同じ位な年の訳だが、絶世の美女と言っても過言ではないこの子の方が人目を引くハズなのだが。

どういう訳か、通行人は俺だけを、見ては見ぬ振りして遠ざかっていく。

「なんなんだ……？」

まるで他の人には彼女は存在していないように、この女の子は明らかに現実離れしていた。

「初めまして、世界の救世主さん？私は世界、ワールドエンドと言います。これからよろしくね？」

電波だ、完全に現実を見失っている。この子はどこか頭が可笑しい子なんだ、可哀想に。

「面白い遊びをしているね。でも俺は暇じゃないからまた今度」

「え、ええ！？あ！そっか……えっと……人間にはハルマゲドンって言った方が早いのかな？あれ？あれ？」

「……」

「ひどいっ！！商品裏のバーコードでも眺めるかのような眼差し！？」

どうやら世界とやらは俗物に染まりきっているらしい。

この調子じゃ当分先までこの世界は安泰だ。

早める足に必死に謎の少女は付いて来る。

「信じてください！たしかに今までの危機を救ってくれた方も、最初は似たような反応をしていました。けどあんまりです……」

俺の他に何人に声を掛けているんだこいつ。

「あ、あの！聞いてます？無視ですか！？あれ？見えてない？おい！ここですよー！」

そう言っただけで目の前で両手を広げて振り回している。

「あの……本当に迷惑だからやめてくれよ。君といると目立って仕方ない。同じ学校の人に出会って変な噂が立つのも嫌なんだ」

少女は首を傾げて微笑んだ。

「大丈夫です。私を見えている人は貴方だけです？彩瀬翔生さんあやせかなる」

「いい病院を紹介しよ……なんで俺の名前知ってるんだ？」

得意げに目の前の少女は胸を張って答えた。

「彩瀬翔生、17歳。私立さびなみ小波学園2年生、文武両道、バスケットボールが仕事の現実主義者」

「え……？」

「小学4年生の頃に両親が海外へ、それ以来一人暮らし。妹は完全寮制の14歳、趣味は暴力」

おいおい。

「世界を変えたいと願う貴方の救済を、私、ワールドエンドは承諾します」

何者だ？この女、俺のことは兎も角、妹の事を知っているのはごく一部のハズ。

「私はワールドエンド、世界の終焉。人は私を神と呼び、宇宙と呼

び、空気と呼び、歴史と呼び」

少女が白く輝きだす。

その異様な姿にも、歩み行く人々の視線は止まらない。

「世界と呼びます。さあ、手を」

白く伸びた腕が、俺に向かって差し出される。

握ってしまいたくなる美しさに惑わされ……。

手を伸ばそうとした刹那、その手は宙を握った。

「え？」

「え？」

少女は、得体の知れない黒い塊に飲み込まれていった。

「あ、れ？」

たしかに存在したハズだ。

一瞬の事で頭が状況に付いていけない。

「あ、あの！今ここにいた女の子何処に行きましたか！？」

気が動転してか、近くにいた通行人に俺は尋ねていた。

今、目の前で起きた出来事は、とてもじゃないが信じ難い。

すると、通行人の男は変なものでも見るかのように答えた。

「君さつきから一人で何喋ってるんだ？」

……っ！？

「な、何言ってるんですか……今いたでしょう？一緒に俺と話してい

た……白い髪の……綺麗な女の子が……」

白い髪の？綺麗な女の子？

果たしてそんな現実離れた女の子が、存在したのだろうか？

男は首を傾げて、これ以上は時間の無駄と察したのか、何も言わず

に去って行った。

日常が崩れていく予感がした。

間違いなくイレギュラー。

日常を狂わすだけの出来事を確信した。

それでも。

『これが夢なら』と、そう願えなかった。

「ほんとに……なんだったんだろうあの子」

『現在、樽宮市たるのみやで起きている連続窃盗事件ですが、未だ犯人の消息は掴めていない模様です。警察によりますと、この事件には大規模な窃盗グループの関与が背景にあると見ているようです』

街中のスクリーンが映し出すのは、毎度のごとく同じようなニュース。

女の子、黒い塊、世界の救済

考えれば考えるほど真実味がなく、本当に白昼夢だったのかもしれない。

何とも言い換えられない違和感だけを胸に、ただ帰宅する他なく、
彩瀬翔生あやせかなるの一日は終わりを告げてしまう。

鎖

二つの影があつた。

一人はフードを被つた若い男。

そしてもう一人は、白色に靡く腰^{なび}まであるストレートヘアの美少女。男は少女を大切に扱っていた。

五体満足、拘束もなく、机の上にはたくさんのお菓子と紅茶、部屋は歪^{いびつ}に急いで取り繕ったような、一面のピンク。

呑気に紅茶を飲む少女と若い男を見て、誰がこれを誘拐と思うだろうか。

「ワールドエンドさん、そう気を悪くしないでくれ」
フードを被つた男はひたすら頭を下げる。

「いきなりこんな事をして本当にすまないと思っているよ」

「折角彼に信じてもらえそうだったのに……とんだ邪魔者だよ……」

「僕もこんな場所で」世界の終わり」と出会えるなんて思ってもいなくてね。少し強引でも、こうして話してみたかったんだよ。後悔はしてない」

少女は退屈そうに机の上のお菓子を転がして遊ぶ。

「初対面の人にする挨拶じゃないですね」

「どうも手癖が悪くてね……欲しいと願ったものはなんでも手に入れたいと思ってしまうんだよ」

部屋の隅に飾つてあるのは、どれもこれも高額な品ばかりだった。

「……あなたも能力者なの？」

「まあね、結構上手に使えるようになっただよ、ホラ」

そう言つて何も無い場所から黒い塊を出現させて、更に大量のお菓子を出して見せた。

「空間転移系ね、移動する物体の質量制限は飛び抜けてそうだけど

残念ね、貴方に用はないです」

無関心とソツポを向ける少女にも、男は気にしていないようだ。

「それで私に何の用ですか？」

「あ、ああ！そうだ！そうだとも！」

男は初めて興奮したかのように、初めて感情を手に入れたかのように、目を見開いて話し出した。

「ワールドエンドなんて存在、僕は実際信じちゃいなかった！そんな話を聞いた時から疑っていたさ！だけど違う！実際こうして目の前にしてみると信じてみたくなる。君は一体なんなんだい？」

「私の事を誰から聞いたの？」

少女の顔からは、徐々に余裕が消えていた。

自分を知っている事への恐怖が抑えられないようだった。

「そんな些細な事さ！僕は君を知りたい、なんで君がワールドエンドなんて呼ばれているのか？何故あの男が君を探していたのかを！知りたい！欲しい！あの男が欲しいが君が欲しい！！」

男はこれまでもなく喜び喘ぐ。

少女は窓の外を眺めた。

どうやら近くに遊園地があるようだ、ゆっくりと回り続ける観覧車を見ながら。

「……………私は……………」

少女は。

「なんだ今の…………？」

頭が痛い。

無理矢理よくわからない映像を見せられたような感覚だった。

時刻は深夜2時、横になってから30分も経っていない。

帰り道での出来事もあり、余計に疲れているのだろうか。

……帰り道？

夢と呼んでいいのかも怪しい夢を思い出す。

白い髪の少女がいた。

ワールドエンド、そう男は言っていた。

急に嫌な予感がした。

でも、何処にいるんだ？

少女の視界、映ったのは観覧車、街のシンボルになっている24時間回り続ける観覧車だった。

あの続きを、少女は何と言うのだろうか。

言いようのない確信を胸に、翔生は家を飛び出す。

目的の場所、樽宮遊園地へ着く。

夢で見た角度を頭の中でトレースする。

近場で、高くない建物、カーテンがなく、部屋の明かりは点いていて、とんでもなくメルヘン一色の……部屋。

「……本当にあった」

3階建ての建物の窓は一つだけ、薄いピンク光が灯る部屋だった。階段を駆け上がり、インターホンを押す。

すぐに男の声がした。

「はい？」

こんな夜遅くにインターホンを押されて警戒している声。

「す、すみません！ちよつといいですか？」

咄嗟に上手い言い訳も出来るはずもなく、曖昧な訪ね方をしてしまった。

ここで扉を開けてもらえなかったらそれまでというのに。

「ちよつと待っていてください。今開けます」

「は、はい！」

すぐに扉が開く。

フードを被った男が現れた。

「！？お前！」

勢いよく扉を閉めようとするが想定してる範囲だ。
素早く足を扉に挟めて、閉めれないようにする。

「ちよつと中に入らせてもらいますよ！」

無理矢理に扉を抉じ開ける、腕力では勝っているようで思っていたより簡単に中に入ることが出来た。

男を押しつけ、リビングへと向かうと、そこには。

「あ、あなたは！やっぱ来てくれたんだね」

そこには、優雅に紅茶を飲む数時間前に出会った少女がいた。

「よくわからないけど、あれ見せたの君なんだろ？」

「うん、私が見せました。信じて来てくれるかは半分半分だったんだけどね」

と悪戯に舌を出してウィンクされる。

.....可愛いじゃねえか。

「どうして？」

「助けて欲しいと思ったから」

「知り合いじゃないのか？」

「全然、全く、これっぽっちも赤の他人」

赤の他人に、どうしたらこんな所に連れて来られるんだよ。

「とりあえず、此処から出るぞ」

「あ、うん」

少女は名残惜しそうに、ティーカップを机に置き、机の上のお菓子をワンピースのポケットの中へと仕舞った。

「えへへ」

微笑んでる場合か。

「おいおい、勝手に人の家上がりこんできて大切な客を横取りなんて勘弁してくれよ.....」

夢で見たフードの男は、どうやら冷静さを取り戻しているようだった。

「詳しい事情は知らねえけど、こいつは俺の客だったハズだろ」

「うるさいな……これだからガキは嫌いだ」

男の前に50cm程の黒い塊が出現した。
あまりにも現実離れた異質のものだった。

「なんだそれ……？」

「ん？ああ、知ってる。知ってるぞ。その顔」

愉快なものを見つけたように、男は笑う。

「Chainと出逢うのは初めてかな？少年」

「Chain？」

「世界を繋ぐ者、異能を持つ者はそう呼ばれているそうだ。……たしかに怖い。僕だって他のChainと出会えば怖くなるさ。恥ずかしがることはない、あまりにも現実離れしていて初めて見る奴は皆、例外なくそういう顔をする」

黒い球体が何かを吐き出す。

男はその黒い塊が吐き出した鈍色に輝くものを取り出し近づいてくる。

「んーここら辺じゃこんなのしかないか」

出刃包丁を取り出して。

「まじかよ……」

馬鹿げている、なんでこんな事に巻き込まれているんだ？

昨日まで普通に過ごしていた、ただの高校生でしかない俺が何故こんな目にあってるんだ？

男は目の前で止まり、大きく振りかぶる。

汚れ一つのない包丁が目の前に迫って

「翔生！」

その声と同時に男の腰にタックルをして突き飛ばす。

「ぐっ！？」

「こっち！」

少女の声のする方へ態勢を立て直して走る。

無意識に手を取って

手を

手が触れた。

□

#

#

□

思考が記号化する。

急に目頭が熱くなり、涙が止まらない。

頭痛は一瞬で、頭の中へ制御できない程の情報量が流れ込んでくる。見たことのない風景、知らない人、学校で習った歴史。

その中に、白い髪の女の子がいた。

少女は一人。

いつも少女は一人で世界を見ていた。

誰かと居ても、誰かと見ても、結局彼女はこの風景を一人で眺めていた。

その姿を見て、救われないうちで死んでしまった。
救いたいと願ってしまった。

身体が熱い。

意識が戻り後ろを振り返ると、男は倒れたまま。

さつき男を突き飛ばしてから、全く時間が経っていないような気がした。

繋いだ手を離さないようにしっかりと握り、翔生はピンク一色に染まる部屋を飛び出した。

「お前……」

「よろしくね、翔生。私はワールドエンド、貴方は世界を繋ぐ者」

「それはもう聞いたよ……」

何をそんなに満足なのか、謎の美少女は満面の笑みで俺の手を握った。

「それはもう聞いたよ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9669z/>

ワールドエンドによろしく！

2011年12月31日17時52分発行